

〔二〕 本校における教育課程とその問題点

倉田 有 邦 持田 都 也 高 森 充 杉 山 光 男
酒 井 為 久

1. まえがき

教育課程に関する諸問題については、昨年度の紀要第16集に、鈴木・高森両教官により、新学習指導要領のはらんでいるさまざまな問題点の指摘がなされていて、それが国家社会に奉仕する人間の育成、能力主義に基づくコース多様化、教育内容の国家統制など、教育の本質から逸脱したねらいを持つものであることが予想、警告されている。このようないくつもの問題点をはらみながらも、来年度47年から中学が、次いで48年度からは高校が、新学習指導要領の適用をうけることになった。本校としては、従来からの研究グループの一つとしての教育課程研究グループに加え、新教育課程委員会を設置して、とりあえず来年度以降の新学習指導要領に基づく教育課程の作成にとりかかった。委員には、運営委員、教務部、各教科のそれぞれ代表が当たっているが、従来からの研究グループと兼ねている者も数名いる。現在のところ、ひとまず来年度より実施の中学の分を仕上げた段階であって、高校については一応原案は出されているものの、細かい検討の余地を残しており、決定は今後に持越された形となっている。今回は、一応決定になった本校中学の教育課程及び検討中の高校教育課程を示し、それに研究グループの会合及び委員会の席で論議されたいくつかの問題点を挙げてみることにした。またそれとは別に、教育をうける側の生徒たちが、現在の教育課程をどのように受けとめているかを探るため、教育課程についての

中学校新教育課程

学 年	1	2	3
国 語	175 (5)	175 (5)	175 (5)
社 会	140 (4)	140 (4)	175 (5)
数 学	155 (4.4)	140 (4)	155 (4.4)
理 科	140 (4)	155 (4.4)	140 (4)
音 楽	70 (2)	70 (2)	35 (1)
美 術	70 (2)	70 (2)	35 (1)
保 健 体 育	125 (3.6)	125 (3.6)	125 (3.6)
技 術・家 庭	105 (3)	105 (3)	105 (3)
外 国 語(英 語)	140 (4)	140 (4)	175 (5)
道 徳	35 (1)	35 (1)	35 (1)
特 別 活 動	50 (1.4)	50 (1.4)	50 (1.4)
計	1205(34.4)	1205(34.4)	1205(34.4)

年間時数 (週時数)

アンケートを実施したが、その結果を示すと同時に、そこに含まれる種々の問題点を考察してみたい。新教育課程に盛り込まれている選択科目の増加に伴うコース制による多様化に論議が集中しているおりから、現に実生徒がどのような受けとり方をしているかを調べることは、意義あることと思われるからである。

2. 中学校の新教育課程の作成経過とその問題点

中学の来年度からの教育課程として決定されたのは下にある表に示した通りであるが、この決定に至るまでの途上、論議話題にのぼったのは大体次の三つの事項であった。

1. 特別活動（特にクラブ活動）の取扱い
2. 選択科目の時間数の配分の仕方
3. 週時間数の決定

このうち、3.は1.および2.の事項との関連において必然的に決まることであるが、週34時間といういわば常識的な線をはみ出した形となったため論議を呼んだ。2.の選択科目の時間数の問題には、英語の時間配分を始め、数学および理科における増加時間、体育の時間数から出る年間の半端時間の配分などが、それぞれ関連し合った形で検討された。数・理・英三教科は、卒業生の大部分がそのまま附高に進学する事情から、全国標準を上まわる時間数をとってもある程度やむを得ない立場にあるわけである。

〈備考〉

1. 各教科の授業時数は、年間授業日数を35週とした場合における総時数であり、かっこ内の数字は週当たりの授業時数である。
2. この表の授業時数の1単位時間は50分とする。
3. 研究のため特別の必要がある場合には、この表を変更することがある。

しかし、最も論議的になり、調整に手間どったのは1.のクラブ活動の取扱い方であった。年間少なくとも15単位時間はこれに当てなければならないが、従来と異なり、ホームルームのロングタイム並みに時間割の中に入れ込まなければならないことになっている。これを年間時数1190(週時数34)のわくの中に入れようとするれば、まずいずれかの教科からその分を削らなければならない。それに具体的な実施方法となると、場所の確保、顧問教官の割当てなどにかなり困難を伴う。そして更に本校の特殊事情として、高等学校との関連が最大の問題となってくる。週時数34の中に入れるにせよ入れないにせよ、中学と高校との時数はそろえておかないと、この時間割内のクラブ活動は実施困難である。結局、表のように週34時間を上まわった「はみ出し」の形で扱うことに、落ち着いたわけであるが、その背景には、第1に、どの教科も一応内定した時間数をゆずる気配がないこと、第2に、まだ決定には至っていないが、高校の教育課程の方も、クラブ活動を週時数34の中に入れるには、各教科の時間配分の上で抵抗がありそうであること、第3に、本校はすでに9年にわたってクラブ全入制をとっており、週1時間の必修クラブということ自体、奇異に感じられるほど、実質的にはそれをはるかに上まわる活動をしてきていること、などが挙げられる。いずれにせよ、具体的な実施方法については未知未定のところが多くあるものの、実質的には従来と同様なクラブ全入を続けた上でそのうちのある曜日により「必修全員参加」の形式をとることに落ち着くことと思われる。

週時数が34を上まわったことについては、何とかこれを避けたいという気持も強く、各教科においてゆずる気配がない以上、クラブ活動のあり方について工夫はできないものかと、種々の考えが出された。たとえば、現在学校行事として行なっている中1の臨海学校、高1の林間学校、それに、球技大会や水泳大会などをクラブ活動とみなすことはできないものか、といったことなど。また毎月曜日に行なう朝礼もしくは集会のあとで時間を若干延長し、全校で何かを行なうことでクラブ活動にかえることはできないかといった意見もあった。だがこれらはいずれも、単一学年の行事をクラブ活動とはみなせないことや、他の授業をつぶして行なう行事を、週時数に入るクラブ活動に数えることはできないことなどから、正式の案とはならなかった。

3. 高等学校の新教育課程の審議経過とその問題点

高等学校の教育課程は前述したように、目下、審議中であり、まだ決定していない。現在のところ表のこ

とく四通りの案が出ているが、このうち(1)は週時数を34とした案であり、(2)~(4)は35とした案である。中学が週時数34.4というふうにクラブ活動を第6限以降にはみ出させた形に決定した以上、(1)の案は除外される公算が大きいといえる。(2)~(4)の案についても、各教科・科目独自の要求が若干からみ合った形で、細部において、まだかなり検討の余地を残している。またこれらの案はいずれも、現在の本校における生徒の学力水準(これは本校の入試選抜法と密接な関係がある)が将来も大きくは変わらないことを前提としたものである。この前提が大きく変化した場合には、改めて全面的に再検討の必要もあろうかと思われる。

ここで各案の細部にわたる説明は省くことにするが全般的に問題と思われることを若干挙げておきたい。

第1に、中学の場合と同様、クラブ活動の取扱い方である。本校では9年前からクラブ全員加入を実施しており(もっとも、3年生は実質的には自由参加であるが)それを今度の改訂で、時間割の中の授業時数にそのままくり入れるには多過ぎて無理であり、きりとして、現在のところ一週延べ数時間はやっているものを無理に週1時間そこそこにへらしてしまうのも、本末転倒というものである。この問題をどう処理するかは全く今後の課題に残されており、他校の例なども参考にしながら、本校独自のやり方を研究して行きたい。

第2に、週時数35時間、3年間の履習単位合計99単位という数字にみられる如く、いわば最大限の履習単位を課していることである。最近数年来、受験体制に密着した高校教育のあり方に対し、内外から批判の声が高まってきており、従来慣例的に当然のこととされていたことを、改めて根本から問いなおし考えなおす傾向が、特に大都市の、いわゆる進学校に多くみられることは周知の通りである。こういった傾向のあらわれの一つに、履習単位数の削減と選択科目の増加がある。従来はほとんどの学校で、学習指導要領に定められた、卒業認定に必要な取得単位数の最低限85単位を、大きく上まわった単位数を履習させていたのを、思いきって限度近くまで引き下げ、自主ゼミナールといった形で、自由選択制を最大限にとり入れた都立上野高校のような例もある。こういったすう勢からみると、本校の案はそのような配慮を全く欠いているかのようなのである。それではこれをもって受験体制への順応と簡単に言うのであろうか。履習単位が従来より減らなかったのは、直接的には各教科・科目で時間数をゆずろうとする気配がなかったことによるものであるが、そのすべてが受験体制のためとは決して言いきれない。各自の担当教科に対する責任上、時間削減に対しては、消極的にならざるを得ないといった事情によるものと解すべきである。それに自由選択制に必然的

に伴うであろう空き時間の増加についても、なるべくこれを避けたいという生活指導面での配慮も働いているわけである。

第3に、前述のことがらとも関係しているが、結局は受験向きコースに固定していることである。芸術を除いて選択科目は第3学年の6単位分のみであり、またAコースの科目は一つも入っていない。現実には、本校の入試選抜法の特異性（抽選入学した附中生の大部分はそのまま附高に進学する）から、英数などのBコース履習には相当な困難を伴う生徒がかなり居るわけなのであるが、そういう生徒たちへの配慮は時間割の上ではなされていないことになる。新学習指導要領の基本となった教育課程審議会の答申(昭44.9.30)に付された参考資料に示されたⅠ～Ⅵの六つの類型のうちで、最も進学者向き色彩の強いⅡ型およびⅢ型に当たるものといえる。こうなったことについては三つほどの理由が考えられる。一つには、やはり現実の問題として受験体制に沿わざるを得ない進学校共通の事情が挙げられよう。因みに最近3ヶ年の本校卒業生の

うちで就職した者は4パーセントに過ぎない。次に、これとは全く別の角度から、いわゆる差別教育への警戒といったことも見逃せない。Bコース履習に困難を来している生徒がかなりいるものの、生徒の間ではそして、恐らくはそれ以上に父兄の間に、平等の取扱いを望む気持ちは非常に強いものであることは否定できない。実利だけを考えるならば、履習の容易なAコースなどを設けることは、本人の実力を伸ばす上から望ましいことと考えられるのであるが、合理性だけでは割り切れない平等性への欲求があることはたしかである。もう一つの理由として、小規模校の限界ということが挙げられよう。1学年3クラス、全校9クラスでは少数者のためのコースを特別に用意するだけの人員的余裕はない。3学年における6単位分の選択科目の展開の幅を少しばかり広げるくらいがせいぜいのところである。

以上三つの要因は、それぞれ異質的なことでありながら、結果において、進学者向きのコースのみに限定せざるを得ない事情を作り出しているわけである。

高等学校教育課程案 (1)

教科	科目 標準単位数○	単位数	1年	2年	3年	計
国語	現代国語 ⑦	7	3	2	2	15 or 17
	古典Ⅰ乙 ⑤	5	2	3		
	古典Ⅱ ③	3 or 5			3 ●2	
社会	倫理社会 ②	2		2		14 or 16
	政治経済 ②	2			2	
	日本史 ③	3 or 5			3 ●2	
	世界史 ③	4		2	2	
	地理B ③	3	3			
数学	数学Ⅰ ⑥	6	6			14 or 16 or 17
	数学ⅡB ⑤	5		5		
	数学Ⅲ ⑤	3 or 5 or 6			3 ●2 ▲3	
理科	物理Ⅰ ③	3		3		15 or 18
	化学Ⅰ ③	3		3		
	生物Ⅰ ③	3	3			
	地学Ⅰ ③	3	3			
	物理Ⅱ ③	} 3 or 6			} 3 } ▲3	
	化学Ⅱ ③					
	生物Ⅱ ③					
	地学Ⅱ ③					
保健	体育男女 ⑨	男 女 11 7	男 女 4 2	男 女 4 2	3	男 女 13 9
	保健 ⑦					
	保健 ②	2	1	1		

本校における教育課程とその問題点

芸術	音楽Ⅰ ②	2	2			4
	美術Ⅰ ②					
	書道Ⅰ ②					
	音楽Ⅱ ②	2	2			
	美術Ⅱ ②					
書道Ⅱ ②						
外国語	英語 B ⑮	15 or 17	5	5	5 ●2	15 or 17
家庭	家庭一般女 ④	女 4	女 2	女 2		女 4
	H.R.及クラブ		2	2	2	6
計			34	34	34	102

注 3年の●, ▲印は選択科目で、いずれか一方を6単位選ぶ。

高等学校教育課程案 (2)

教科	科目 標準単位数○	単位数	1年	2年	3年	計
国語	現代国語 ⑦	8	3	3	2	16 or 18
	古典Ⅰ乙 ⑤	5	2	3		
	古典Ⅱ ③	3 or 5			3 ●2	
社会	倫理社会 ②	2		2		15 or 17
	政治経済 ②	3			3	
	日本史 ③	4			4	
	世界史 ③	3 or 5		3	●2	
	地理 B ③	3 or 5	3		●2	
数学	数学Ⅰ ⑥	6	6			14 or 16 or 17
	数学ⅡB ⑤	5		5		
	数学Ⅲ ⑤	3 or 5 or 6			3 ●2 ▲3	
理科	物理Ⅰ ③	3		3		15 or 18
	化学Ⅰ ③	3		3		
	生物Ⅰ ③	3	3			
	地学Ⅰ ③	3	3			
	物理Ⅱ ③	3 or 6				
	化学Ⅱ ③				3	
	生物Ⅱ ③					
	地学Ⅱ ③				▲3	
保健	体育男⑨ 女⑦	男 11 女 7	男 4 女 2	男 4 女 2	3	男 13 女 9
	保健 ②	2	2	2		
芸術	音楽Ⅰ ②	2	2			4
	美術Ⅰ ②					
	書道Ⅰ ②					
	音楽Ⅱ ②	2	2			
	美術Ⅱ ②					
書道Ⅱ ②						
外国語	英語 B ⑮	16 or 18	5	5	6 ●2	16 or 18

家庭	家庭一般 女 ④	女 4	女 2	女 2		女 4
	H.R.及クラブ		2	2	2	6
	計		35	35	35	105

注 3年の●, ▲, 印は選択科目で, いずれか一方を6単位選ぶ。

高等学校教育課程案 (3)

教科	科目 標準単 位数○	単 位 数	1 年	2 年	3 年	計
国 語	現代国語 ⑦	7	2	2	3	16 or 18
	古典Ⅰ乙 ⑤	6	2	4		
	古典Ⅱ ③	3 or 5			3 ●2	
社 会	倫理社会 ②	2		2		16
	政治経済 ②	2			2	
	日本史 ③	4			4	
	世界史 ③	4	2	2		
	地理 A B ③	4	2	2		
数 学	数学Ⅰ ⑥	6	6			14 or 16 or 17
	数学ⅡB ⑤	5		5		
	数学Ⅲ ⑤	3 or 5 or 6			3 ●2 ▲3	
理 科	物理Ⅰ ③	3		3		15 or 18
	化学Ⅰ ③	3		3		
	生物Ⅰ ③	3	3			
	地学Ⅰ ③	3	3			
	物理Ⅱ ③	3 or 6			3 } ▲3	
	化学Ⅱ ③					
	生物Ⅱ ③					
	地学Ⅱ ③					
保 体	体育 男女 ⑨ ⑦	男 11 女 7	男 4 女 2	男 4 女 2	3	男 13 女 9
	保健 ②	2	2			
芸 術	音楽Ⅰ ②	2	2			3 or 5
	美術Ⅰ ②					
	書道Ⅰ ②	1 or 3		1	●2	
	音楽Ⅱ ②					
	美術Ⅱ ②					
書道Ⅱ ②						
外国語	英語 B ⑮	16 or 18	5	5	6 ●2	16 or 18
家 庭	家庭一般 女 ④	女 4	女 2	女 2		女 4
	H.R.及クラブ	6	2	2	2	6
	計		35	35	35	105

注 3年の●, ▲, 印は選択科目で, いずれか一方を6単位選ぶ。

本校における教育課程とその問題点

高等学校教育課程案 (4)

教科	科目	標準単位数○	単位数	1年	2年	3年	計	
国語	現代国語 ⑦		8	3	2	3	16 or 18	
	古典Ⅰ乙 ⑤		5	2	3			
	古典Ⅱ ③		3 or 5			3 ●2		
社会	倫理社会 ②		2		2		15 or 17	
	政治経済 ②		2 or 4			2 ●2		
	日本史 ③		4			4		
	世界史 ③		4		4			
	地理 A ③		3 or 5	3		●2		
数学	数学Ⅰ ⑥		6	6			14 or 16 or 17	
	数学ⅡB ⑤		5		5			
	数学Ⅲ ⑤		3 or 5 or 6			3 ●2 ▲3		
理科	物理Ⅰ ③		3		3		15 or 18	
	化学Ⅰ ③		3		3			
	生物Ⅰ ③		3	3				
	地学Ⅰ ③		3	3				
	物理Ⅱ ③							} 3 } 3▲
	化学Ⅱ ③							
	生物Ⅱ ③		3 or 6					
	地学Ⅱ ③							
保健	体育男女 ⑨		男女 11	男女 4	男女 4	3	男 13 女 9	
	保健 ⑦		男女 7	男女 2	男女 2			
	保健 ②		2	2	2			
芸術	音楽Ⅰ ②	}	2	} 2			4	
	美術Ⅰ ②							
	書道Ⅰ ②							
	音楽Ⅱ ②	}	2					
	美術Ⅱ ②							
書道Ⅱ ②								
外国語	英語B ⑮		16 or 18	5	5	6 ●2	16 or 18	
家庭	家庭一般女 ④		女 4	女 2	女 2		女 4	
	H.R.及クラブ		6	2	2	2	6	
				35	35	35	105	

注 3年の●, ▲, 印は選択科目で、いずれか一方を6単位選ぶ。

4. アンケートにあらわれた現行高校教育課程についての生徒の意識

高校の新教育課程については、前項で述べたように目下検討中といったところであるが、では現行の教育課程について、生徒はどのような受けとめ方をしているのだろうか。先に挙げた新教育課程案に関する二三の問題点との関連において、現在の生徒の意識を調

べてみることは、何らかの参考になるであろうと考えられる。ただし、予備知識のほとんどない自分の学校以外の事情をほとんど知らない生徒たちのことゆえ、判断の根拠ははなはだあいまいで、首尾一貫を欠くものであることは否定できない。漠然とした感じで適当に答えたものが大部分であろうと察せられる。したがって、これはあくまでも参考のためのものであり、むしろ、誤解や曲解に基づいた判断に対しては、極力こ

れを解くように、平素より努めてゆかなければならぬと考えられる。

調査対象は中3から高3までの生徒全員。中3についてはいささか判断が無理だと思われる質問であるが判断の推移をみる意味もあろうかと考えて、対象に加えたわけである。

教育課程についてのアンケート

調査対象：中3 89名 高1 133名 高2 132名
高3 129名 計483名

1 現在、本校も含めて大部分の高校では、一週33時間(H.R.や集会等は別)を行なっていますが、法規上では、最少限なら29時間でもよいことになっております。それについてどう思いますか。

- ア 現在よりも多くした方がよい。
- イ 現在の程度が適当である。
- ウ 現在よりへらした方がよい。

	中3	高1	高2	高3	計
ア	0	6	9	10	25
イ	41	64	43	61	209
ウ	48	63	80	58	249

年間履習単位33については、ほぼ現行通りでよいとするものと、へらした方がよいとするものが、ほぼ半々とみていいであろう。高2だけは他の学年に比べ、軽減を望むものの割合が多くなっているが、これはこの学年から科目が細分化して急に数がふえ、かつ学習の困難度もかなり急激に増加するからであろうと思われる。

2 現在、本校では高3で一部の科目(古典、数ⅠⅡ、数Ⅲ、化学、物理、生物、英語)が、選択制(7科目中から二つ選ぶ)になっている他は、大部分の教科、科目は全員共通に履習することになっています。これについてどう思いますか。

- ア 選択科目の時間数及び種類をもっとふやした方がよい。
- イ 現在の程度(46年度は週2時間、47年度からは週4時間の予定)でよい。
- ウ 選択科目は置く必要なし。全員が同じものをやるべきである。

	中3	高1	高2	高3	計
ア	37	66	84	86	273
イ	33	54	40	28	155
ウ	7	13	7	15	42
無答	12	0	1	0	13

中3に無答が多いのは、実感がわからないことゆえ当然であろう。まず大半のものは、選択科目の拡充を望んでいるといえそうである。それでは、どのような科目を選択科目として望んでいるのであろうか。

3 もし選択科目の種類や時間数をふやし、必修科目をその分だけへらすとすれば、あなたはどのような選択の仕方をするでしょうか。

- ア 結果的には現行のものとはほぼ同じような選び方をするであろう。
- イ 現行とはかなり異なった選び方をするであろう。
- ・その場合、現在より多く履習したい科目は何ですか。二つ以内で挙げて下さい。()
- ・現在より少なくしたい。もしくはやめたい科目は何ですか。二つ以内で挙げて下さい。()

	高1	高2	高3	計
ア	74	56	41	171
イ	58	76	87	221
無答	1	0	1	2

この項目は中3の生徒には実感がなくてわからないであろうと思われるので、高校生だけに限った。先の項目で、選択科目の増加を望んでいるものの大部分はやはり、この項目においても、現行のものとは異なった科目を希望していてイを選んでいる。そしてその場合、現在より多く取りたい科目、および少なくするかやめたい科目として、生徒の挙げたものは次の通りであった。これは最も実感のある切実度の高いと思われる高2および高3の分だけを挙げておくことにする。なお、生徒の方では「教科」と「科目」の用語上の区別はほとんど意識しておらず、また、現在の学年で履習している科目のみに限って答えたものと、3ヶ年の全履習科目を見渡して答えたものが混在している関係上、教科・科目の呼称は正式のものではない。例えばA、B類型の別は省いてあるが、A類型についての実状を知っているものはほとんどいないと思われる。

(高2)

	現在より多く	現在より少なく	計 (現状の変更を希望)
数学	26	10	36
物理	11	22	33
英語	26	6	32
化学	16	13	29

本校における教育課程とその問題点

古典	8	13	21
世界史	16	1	17
倫理・社会	1	12	13
日本史	11	1	12
保健	0	11	11
生物	3	4	7
家庭	0	7	7
地理	0	6	6
現代国語	3	2	5
その他	10	4	14

4 数学・理科・英語などの教科においては、それぞれ、大学進学を前提にしたB類型と、進学を前提としないA類型とがあります。48年度からは更にもっと易しい、数学一般、基礎理科、初級英語といった科目をもうけてもいいことになっています。ところで、本校も含めて進学者が大部分をしめる高校では、いずれもB類型のみを採用しているのが現状です。しかし一方では、そのために、それぞれの教科において、学習困難を来している生徒がいることも事実です。これらのことについてどう思いますか。

ア 今まで通りB類型だけでよい。

イ 科目によってはA類型も採用して、生徒に選択させればよい。

(高3)

	現在より多く	現在より少なく	計 (現状の 変更を希望)
物理	12	35	47
数学	16	23	39
化学	19	11	30
世界史	21	8	29
英語	21	6	27
日本史	20	3	23
古典	5	16	21
現代国語	13	2	15
政治経済	1	9	10
生物	7	0	7
体育	4	2	6
その他	11	2	13

	中3	高1	高2	高3	計
ア	13	60	41	40	154
イ	81	73	91	91	336

この項目については、現在A類型の科目を置いていない関係上、実感としてはわからないと思われるのでそれぞれ自分で適当な判断をして答えていると思われる。全体的に、選択制の中でA類型を置くことに賛成する意見が大半を占めているが、もし実際に採用した場合、A類型の科目を選ぶ人数はこれをかなり下まわるのではないと思われるし、B類型だけでよいとする意見にも、自己の経験のみから判断しているもの、観念的に複線型コースに反対するものなど、異なった要素が入り混じっているものと思われる。

両学年を通じ、数学・理科は、現在より多く履習したいものと、少なくしたいものが共に多く、いわば分極化の傾向があり、英語・歴史関係では多くしたいものの多い割合に、少なくしたいものは少数であり、倫理・政経・保健・家庭などでは履習を好まない者が多いといった傾向がみられる。これらはやはり、受験に直結する科目は希望するが、そうでない科目はやりたがらないという、受験校特有の傾向とみてよい。生徒の希望をそのまま受け入れるわけにはいかないのは当然であるが、物理や数学のように分極化の大きい科目については、やはり必修よりも選択の部分をつやして個人差に対応できるような配慮をすべきであろうし、英語や歴史のように増加希望の多い科目については、必修の分とは別に選択による増加単位を設けるような措置が望ましいわけである。

以上見てきた通り、本校生徒の教育課程についての希望の傾向は、大まかにいえば選択制の拡充ということになるだろうが、その選択はほとんど受験を目標としたものであり、かつ全体の履習単位は軽減を望む声も少なくはない。しかしこういった傾向が圧倒的多数というほどのものではなく、現状に近い線でもよいとするものも3分の1近くはいるとみてよいであろう。これは、本校内だけの極めて限られた範囲での調査に過ぎないのであるが、いわゆる学力水準よりみた場合、進学校というわくの中でみる限りでは、かなり上下の開きが大きい生徒をかかえている関係上、世間一般の進学校としての標準的な結果があらわれているとみていいものと思われる。

そして今後、学校格差の解消ないしは縮小といった方向(大都市を持つ府県ではある程度それがみられる)が進んだ場合、選択制の拡大は当然考えられなければならないであろうことは、この結果からある程度読みとれるのではないだろうか。最後に、本校の生徒の

質的構成，学力水準をあらわすパラメーターとして，進路状況を掲げておく。希望と現実とのずれの大きさは，そのまま進学校の標準といえるものと思われる。

生徒の進路希望および卒業生進路状況 人数 (%)

	高 1	高 2	高 3	卒業生 (43~45年度)
国公立 大学	108 (81.2)	100 (75.8)	95 (73.6)	143 (33.8)
私立大学 または 短大	9 (6.8)	15 (11.4)	28 (21.7)	208 (49.2)
就職・家事	7 (5.3)	9 (6.8)	2 (1.6)	17 (4.0)
未定または 進学待ち	9 (6.8)	8 (6.1)	4 (3.1)	55 (13.0)
計	133	132	129	423